

## **Infracommunication or familiarity?**

### **Attribution of uniquely human emotions to the self, the ingroup, and the outgroup**

#### **人間以下化か親密さか？自己、内集団、外集団への人間に独特な感情の帰属**

Cortes, Demoulin, Rodriguez, Rodriguez, and Leyens (2004) Infracommunication or familiarity? Attribution of uniquely human emotions to the self, the ingroup, and the outgroup. PSPB, 13(2), 243-253.

Rep. 小森めぐみ.

## **Abstract**

人々は外集団よりも内集団により多くの二次感情を帰属する。この効果は人間以下化 (infracommunication) 理論によって解釈されている。しかし、この帰属の違いは親密性からも説明することができる。なぜなら二次感情は一次なものに比べ、目に見えにくく激しさに欠けると考えられているためだ。人間以下化に対するこの代替説明が、3つの研究を通して検討された。実験1では被験者間要因のデザインがとられ、参加者は一次感情と二次感情を自己、内集団、外集団に帰属した。実験2では参加者は内集団と外集団に対して回答した。実験3では参加者は内集団と、親密性の異なる外集団いくつかの帰属を行った。データは親密性からの代替説明では説明できないものだった。考察では人間以下化が起きない状況を中心とした議論が行われた。

### 多様な社会集団の存在

- ❖ 異なる社会集団は目に見えるちがいをもち、この違いを説明するためにステレオタイプが使用される(Hegarty & Pratto, 2001; Leyens, Yzerbyt, & Schadrin, 1994)
- ❖ 社会集団の違いを説明するのにステレオタイプだけではなく異なる特質を帰属させる場合もある(Demoulin, Leyens, & Yzerbyt, 2002; Haslam, Rothschild, & Ernst, 2000, 2003; Hirschfeld, 1996; Rothbart & Taylor, 1992)
- ❖ さまざまな民族中心主義(ethnocentrism, Sumner, 1906)を考えると、人間は無意識的に、自分の所属する集団が他集団よりも優れた、より人間らしい特質をもっていると考える=外集団を人間以下化(infracommunication)することもうなづける。

### 本論の内容

- ❖ infracommunication のはたらきと存在を示す経験的な証拠の提示
- ❖ 古典的な内集団・外集団の違いの知見を親密性(Hartley, 1946; Prentice, 1990)から説明可能か検討
- ❖ infracommunication 仮説と親密性仮説を比べる3つの研究を紹介

### Infracommunication and secondary emotions

- ❖ Leyen et al(2000) 知能、言語、洗練された感情は人間独特のもの。
  - これらが外集団よりも内集団に多いと考えること=infracommunication
- ❖ Leyens and colleagues (2000, 2003) 感情面に注目。
  - ローマ系言語には sentiment と emotion の区別あり
- ❖ Demoulin et al (2004) 感情に関するしろうと概念の文化差を3国家4言<sup>1</sup>語で検討
  - 参加者は提示された感情語が人間に独特なものか、動物でもみられるかなどの次元で評定
  - 人間独特の感情はそうでないものと比べ<sup>2</sup>、より鈍くて見にくく、長続きし、人生後半で現れ、

<sup>1</sup> 国はベルギー、スペイン、アメリカ合衆国。言語は英語、オランダ語、フランス語、スペイン語。

道徳性と認知に関係し、内的に原因があると考えられていた

- ❖ 人間に独特なものと考えられなかった感情＝一次感情(Ekman, 1992, but see Wierzbicka, 1999)二次感情＝人間独特なものとした
- ❖ Paladino et al., (2002) IATを用いた実験の結果、内集団と二次感情、外集団と一次感情の連合がその逆よりも強いことがわかる
- ❖ Demoulin et al., 2002; Gaunt et al, in press 様々な社会集団が二次感情を内集団に帰属する
- ❖ Demoulin et al., 2002; Gaunt et al., 2002 など 二次感情を外集団に帰属したがる
- ❖ Vaes, et al., 2003: Vaes et al., 2002 二次感情を表明した内集団成員を援助、模倣、接近するが、二次感情を表明した外集団成員にはこれらの行動は生じない

☆上記の先行研究は *infrahumanization* から説明されるが、親密性(familiarity)からの説明も可能

### The familiarity hypothesis

Demoulin et al., 2004 二次感情は一次感情よりも目に見えやすい

参加者が一次感情と二次感情を二種類ずつ表情であらわし、内集団のカメラマンがそれを撮影し、仮説を知らない評定者9名が表情を評定

外集団よりも内集団成員の二次感情を強いと読み取る

しかし、外集団よりも内集団の成員の顔の方が親密性が高いので、二次感情を検出しやすく、それが結果につながったという代替説明もあり

同様の説明は他の研究でも指摘されている(e.g., Beupre & Hess, 2003)

集団間関係を検討した古典的な研究では、未知の集団はネガティブな面から見られやすいが(Hartley, 1946)、接近仮説(Allport, 1954)によると、他集団への接触はこのバイアスを低減させる(Pettigrew, 1998)

本研究で検討する問題

二次感情の過小帰属は外集団を *infrahumanize* した結果なのか、それとも外集団への親密性の低さが二次感情の検出しにくさをもたらしているのか？

### Overview of the studies and hypotheses

親密性仮説を検討するため、二次感情を帰属する3つの研究が行われた

実験1：被験者間で自己/内/外集団に感情を帰属 実験2：混合計画で自己/内/外集団に感情を帰属

実験3：内/複数の外集団<sup>3</sup>+ターゲット集団への親密性、好意度、内集団の状況への外集団の関連

実験1と実験2の仮説

親密性仮説からの予測：二次感情の帰属は自己>内集団>外集団 一次感情には違いなし<sup>4</sup>

*infrahumanization* からの予測：二次感情の帰属は自己=内集団>外集団。一次感情には違いなし<sup>5</sup>

自己の内集団への同一化と外集団との区別の強調(e.g., Demoulin et al., 2003)を反映

実験3の仮説

親密性仮説からの予測：親密性の程度に応じて二次感情の帰属にも違いが出る

---

<sup>2</sup> 感情のポジティブネガティブに関わらず

<sup>3</sup> Wallons(内集団), Flemish, Parisians, Praguois。右に行くほど親密性低い。親密性を測る尺度も挿入

<sup>4</sup> 観察が容易であるため

<sup>5</sup> 一次感情は人間にも動物にも見られるため。ポジ/ネガは関係ぼうと考えられている

二次感情の帰属と集団との親密さの評定は相関する  
 inhumanization 仮説からの予測：二次感情の帰属と親密性の程度や集団への好意度とは無関係

## STUDY 1

**概要** 参加者は自己、内集団、外集団に関する記述を行った。過去の研究 (Prentice, 1990; Johnson, 1987) では他者よりも自己について privileged な情報を報告したり隠れた感情の存在を報告したりしており、結果が親密性から説明されていた。Inhumanization 仮説は二次感情について、親密性仮説とは異なるパターンを予測する

### 方法

**実験参加者** 大学生 73 名が講義の一貫として実験に参加。大部分は女子学生

**手続** 実験は“自己と他者の類似点と相違点を検討するもの”と伝えられ、特定のターゲットを用意された 26 個の特性からあてはまると考えるもの 12 個を選んで記述するよう求められた。

**独立変数** 記述の対象 (自己/内集団=Canarians/外集団=Spanish)

**素材** 質問紙は Leyens et al (2001)、Exp2 で使用されたものと同じ<sup>67</sup>

二次ポジティブ感情：contentment, delight, enjoyment

二次ネガティブ感情：melancholia, resignation, disarray

一次ポジティブ感情：happiness, pleasure, passion

一次ネガティブ感情：aversion, anger, irritation

### 結果

記述に対し、ターゲット (自己/内集団/外集団) × 感情の種類 (一次/二次)  
 × 感情のバイレンス (ポジティブ/ネガティブ) の ANOVA  
 二次の交互作用が有意 ( $F(2, 70)=7.90, p<.001$ )

二次感情の結果

ターゲットの主効果  $F(2, 70)=9.18, p<.001$  内集団 (1.50) << 自己 (1.18) << 外集団 (.90)

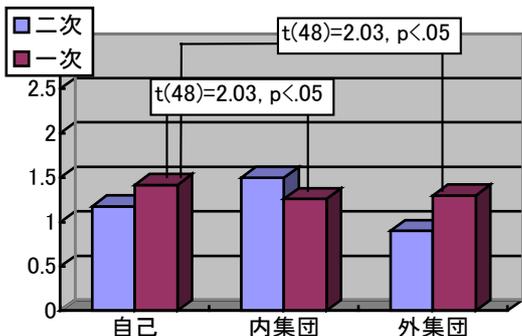
一次感情の結果

バイレンスの主効果  $F(1, 70)=60.54, p<.001$  ポジティブ (1.90) << ネガティブ (.76)

交互作用  $F(2, 70)=9.08, p<.001$  自己 ポジティブ (2.12) << ネガティブ (.72)

内集団 ポジティブ (2.13) << ネガティブ (.39)

外集団 ポジティブ (1.44) = ネガティブ (1.16)



<sup>6</sup> 一次・二次とも当該領域で典型的 (Demoulin, et al., 2004)、ポジネガのバイレンスの平均が同じ

<sup>7</sup> その他、有能さ、社交性、内・外集団へのステレオタイプ (Quiles et al., 2001) がフィルターとして挿入

## 考察

自分の集団よりも自己のほうを良く知っていることは確か(Prentice, 1990)にもかかわらず、二次感情の帰属は内集団と外集団の中間に位置=infracommunity 仮説に一致  
一次感情にはこのパターンは見られず<sup>8</sup>

## STUDY 2

**概要** 実験1は被験者間デザインを用いたが、実験2は被験者内デザインを使用。  
これによって自己と内集団の区別をつけようとする働きが増す  
親密性仮説からの予測：二次感情の帰属 自己>内集団>外集団  
infracommunity からの予測：二次感情の帰属 内集団=自己>外集団

## 方法

**実験参加者** 大学生 84 名が講義の一貫として実験に参加。大部分は女子学生

**手続** 実験1とほぼ同じ。ただし以下の点異なる  
記述の際に集団について考えたか、その場合、その集団はどこだったか、  
半数の参加者は自己と内集団を評定、残りの参加者は自己と外集団を評定<sup>9</sup>。

## 結果と考察<sup>10</sup>

二次感情の結果

記述に対し、ターゲット (自己/集団) ×感情のバイレンス (ポジティブ/ネガティブ)  
×集団 (対内集団/対外集団) の混合計画の分析  
ターゲットの主効果  $F(1, 82)=11.70, p<.002$  自己(1.29) << 集団(1.07)  
バイレンスの主効果  $F(1, 82)=46.34, p<.001$  ポジティブ(1.56) << ネガティブ(.80)  
集団の主効果  $F(1, 82)=13.87, p<.001$  対内集団(1.56) << 対外集団(1.04)  
有意な交互作用はターゲット×集団のみ  $F(1, 82)=6.30, p<.002$

質問紙別の検討

### ① 自己と内集団バージョン

対象 (自己/内集団) ×二次感情のバイレンス (ポジティブ/ネガティブ)  
バイレンスの主効果は見られた( $F(1, 42)=17.59, p<.001$ )が、対象の効果は ns.

4名の参加者が自己の回答中に集団を意識したと回答。集団の回答中は全員が集団を意識

### ② 自己と外集団バージョン

バイレンスの主効果( $F(1, 40)=30.40, p<.001$ )と対象の主効果( $F(1, 40)=20.58, p<.001$ )が有意  
交互作用は ns.

全ての結果は親密性仮説よりも infracommunity 仮説を支持

<sup>8</sup> 一次感情に見られたバイレンスとターゲットの交互作用は、様々な観点から考察が可能だが、集団間の差は有意ではないので過大解釈はできない

<sup>9</sup> 評定の順序はカウンターバランスされたが、順序の効果は見られなかったため、分析では無視

<sup>10</sup> 一次感情にはバイレンスの効果(ポジ>ネガ)しか見られなかったため、ここでは無視。自己と外集団の一次感情のみ

二次感情の帰属は内集団＝自己>外集団、一次感情の帰属には差がない  
実験1でみられた自己と内集団の差は実験2では消失。これは自己が内集団の一部として認識された結果かもしれない。あるいは、未知の原因があるのかもしれない

### STUDY 3

**概要** 実験3では、参加者は内集団か複数の外集団を評定。質問紙の終わりには操作チェックとして親密性が尋ねられたほか、内集団の状況と外集団の関係、外集団への好意度が尋ねられた。

#### 方法

**実験参加者** ベルギーの Louvain-la-Neuve 通りを歩いていた歩行者 56 名（男性 25 名女性 31 名）<sup>11</sup>。

**手続** 実験1、2とほぼ同じ。

1/4の参加者は内集団を評定、残りの参加者はそれぞれ親密性の異なる外集団を評定+質問項目

**素材** 質問紙は Leyens et al (2001)、Exp2 で使用されたものと同じ

二次ポジティブ感情：admiration, delight, passion

二次ネガティブ感情：embarrassment, rancor, worry

一次ポジティブ感情：excitation, calm, amusement

一次ネガティブ感情：panic, exhaustion, aggression

親密性指標：Linville & colleagues (1996) を採用<sup>12</sup>。

関連性：当該集団と内集団の関連性が尋ねられた ( $\alpha = .67$ )

好意度：当該集団への共感が尋ねられた ( $\alpha = .79$ )

#### 結果と考察<sup>13</sup>

親密性の結果 各質問項目で対象集団の主効果がみられる Flemish > Parisians > Praguois

二次感情の結果

記述に対し、ターゲット (Wallons(内集団)/Flemish/Parisians/Praguiois)

×感情のバイレンス (ポジティブ/ネガティブ) の混合計画の分析

バイレンスの主効果  $F(1, 52) = 7.58, p < .001$  ポジティブ(1.32) >> ネガティブ(.81)

集団の主効果  $F(1, 52) = 3.96, p < .002$  集団間で二次感情の帰属に相違

二次感情の帰属が少なかったのは、親密性が最も高いと考えられた Flemish

$F(1, 26) = 8.34, p < .01$  内集団(1.23) >> Flemish(.57)

有意な交互作用はターゲット×集団のみ  $F(3, 52) = 4.34, p < .001$

親密性と二次感情

二次感情の帰属と親密性との相関 3項目とも負の相関を示す( $r_s(41) = -.38, -.40, -.211, p < .02, .02, .10$ )

---

交互作用が有意。これは自己への帰属が希少(.38)だったことによる。

<sup>11</sup> 参加者の年齢は17~57歳。平均は22.1歳

<sup>12</sup> 当該集団の成員に何人知り合いがいるか、よい友人がいるか、一月にどのくらい相互作用を持つか

<sup>13</sup> 一次感情にはバイレンスの効果(ポジ>ネガ)しか見られなかったため、ここでは無視。自己と外集団の一次感情のみ

外集団間の親密性 集団ごとの帰属と親密性の相関も ns.<sup>14</sup>

関連性と二次感情の帰属数の相関  $r(41)=.34, p<.03$

好意度と二次感情の帰属数の相関  $r(41)=.23, p<.10$

関連が高いと知覚されているほど、二次感情は帰属されない。好意度の高低もほぼ相関なし  
二次感情の帰属へこれらの変数が与える媒介、調整的な影響については考察の必要あり

## GENERAL DISCUSSION

### 復習

Infracommunication 理論(Leyens et al., 2000) : 人は自分の集団に外集団よりも人間的な特質が多いと考え、それゆえ人間に独特な感情である二次感情は内集団より外集団に多いと考えがちであることしかし、二次感情は検出しにくいことから、内集団への親密性の高さが検出のしやすさにつながって、二次感情の帰属を増やしているという代替説明(e.g., McGuire & McGuire, 1988)

本研究はこのふたつの対立する説明を3つの研究を通して検討

実験1 : infracommunication 研究の典型的なもの。被験者間要因での検討

実験2 : 親密性研究の典型的なもの。被験者内要因での検討

実験3 : 親密性の異なる3つの外集団を比較、検討。

すべての実験で、親密性からの説明による予測は成立せず

Infracommunication 理論からの説明への二つの疑問点

過去の研究は、infracommunication は集団レベルで生じないとされてきた

しかし、集団間の関係が明確でない場合(実験1)、二次感情の帰属は自己<内集団

関係が明確になると(実験2)、この差は消失。自己への二次感情の帰属に研究間で有意差はなし

実験3では、Paris と Prague の住民に infracommunication は生じなかった

彼らがベルギー人に与える影響は微小であることが、結果に影響したのかもしれない

親密性の評定と二次感情の帰属の間にみられた負の相関がこの考察を支持

この知見についても、今後の検討が必要(Leyens et al., 2003)

類似の知見 Struch and Schwarz(1989) 厳格正統主義(ultraorthodox)ユダヤ人とイスラエル人  
同一視されることを恐れるほど、外集団を非人間的に判断。

ただし、この外集団は参加者になじみがある。なじみのない外集団ではどうなるか?

ニュージーランドのマオリ人やボリビアのアイマラ人は?

もし未知の外集団にも infracommunication が見られた場合、関連性の仮説は棄却

未知の集団を用いて関連性と infracommunication の研究が必要だが、ここで infracommunication が生じるとは考えにくい

オリンピック前に行われたオーストラリア人とニュージーランド人の比較研究

感情語をそれぞれに帰属させたところ、オーストラリア人はポジティブ感情語(一次&二次)、ニュージーランド人はネガティブ感情語(一次&二次)を帰属される

これは Hartley (1946) の架空の集団へのネガティブステレオタイプ研究に一致する結果

---

交互作用が有意。これは自己への帰属が希少(.38)だったことによる。

<sup>14</sup> ただし、内集団との相互作用の時間の長さは二次感情の帰属と正の相関( $r(15)=.59, p<.04$ ).

結論

Infrahumanization=外集団への二次感情帰属の低さは親密性から説明することはできない

=二次感情が外集団で観察されにくいことが原因ではない

外集団との関連性が二次感情の帰属を説明できるかもしれない

外集団との関連性が高いほど、二次感情は帰属されないと予測できる。今後の検討が必要